

今週の特祷は、神様への呼びかけの後、

「どうかわたしたちをみ旨にかなう者とし、み前に喜ばれるすべての良い業を行わせてくださいますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン」と祈りました。

こんなことは、当たり前の話、良いことをしましょう、というスローガンだけのように思えます。しかし、この言葉がどこから来たのか調べると、大変意義深い言葉になってきます。

これは、パウロがエフェソの信徒に宛てて書いた手紙からとられたものです。エフェソは、古代世界の七不思議のひとつ、女神アルテミスの大神殿があったところで、偶像崇拝が行われていた町です。そこにパウロは3年間とどまって、教会の成長のために尽くしたと言われています。

その後、パウロは牢獄に入れられて、そこからエフェソの人びとに、私たちがクリスチャンになったのは、自分の力でなったのではない、神様からの力によっているのであって、それにはちゃんとした目的があることを、次のように話しています。

口語訳の方がわかりやすいので、それを読みます。

『あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行いによるのではない。それは、だれも誇ることはないためなのである。わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである。神は、わたしたちが、良い行いをして日を過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである。』（エペソ2：8～10）

私たちはみんな神様によって作られた作品であって、最初から用意されている良い行いをするために、キリストにあって作られているんだ、ということですね。それじゃ、良い行いをする、とはどういうことでしょうか？

今日の使徒書、使徒言行録には、イエス様が天に昇り、弟子たちを中心とした教会が、人びとの食事のための奉仕職である、執事にステファノたち7人が選ばれたことと、そのステファノが逮捕されて、立派な説教をした後、殉教した話が出てきました。

この話からわたしたちは、ふたつのことが学べると思います。

一つは、弟子たちの活動が、賜物を生かして、役割の分業があった、ということです。まず、十二人の使徒たちが弟子たちを集めて、「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。それで、兄弟たち、あなたがたの中から、霊と智慧に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。」と言っています。

12人だけでなく、他の人にも、賜物に従って、キリストの教会の働きを担う人を任命することの大切さを語ったところです。もっとも、12弟子だけが、神の言葉の専門家であって、ステファノたちは、そうではないか、と言えば、ステファノは、今日のところでは省略されていますが、逮捕されて、堂々と説教していますので、ステファノたちは神の言葉に奉仕しなかったと言えば、間違っていると思います。

しかし、みんなが同じ仕事をするのではなく、それぞれの特性を活かして、本当に自分にふさわしい仕事に打ち込むことが大切だ、と示されているということでしょう。

そして、二つ目に学ぶことは、弟子たちはイエス様のように生きていて、死んでゆくということ。これは、イースターの前の日曜日にしばしば私が話したことですが、キリストを演じているということです。このステファノが石打ちの刑にされる時、ふたつの言葉を言い残しています。

「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」という言葉と、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」という言葉です。

ステファノは、弟子たちの仕事を分担した、ということだけでなく、その死に方を、イエス様に倣った、ということが言えるのではないのでしょうか。

イエス様は十字架に架かった時、神様に向かって、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」と言っています。これは「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」というステファノの言葉と良く似ています。

また、死ぬ間際にイエス様は、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と言われましたが、ステファノは「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と言っています。「ゆだねる」は対等あるいは目上の方が下の人に言う言葉で、ステファノが「お受けください」と、目上の人に言うのと、違うと言えば違いますが、同じことを言っているわけです。

ステファノたちが、使徒たちの始めた仕事を分かち合ったことと、ステファノ自身、イエス様と同じような死に方をした、ということが、クリスチャンにとっての重要な役割のように私には思えます。

それで、良い行いとは、イエス様の行われていたことを、それぞれ分担して、みんなキリストのマネをすることだ、と言えるのではないか、と思います。

この大切な仕事には、「霊性」ということが重要な役割をしています。これがキリスト教のエッセンスのように私には思えます。

カトリックのネラン神父の定義です。

「肝腎なのは『霊性』と呼ばれるものだ。この奇妙なことばは、**Spirituality**の訳語である。その意味はこうだ。聖書の中にはキリストのさまざまな姿が見られるが、そのうちの一つを選びとり、そのキリスト像に従って自己の信仰を実践することである。」

私たちが、クリスチャンになった、というのは、今までの自分中心の生き方から、自分の中心にキリストを置いて、イエス様の生き方に倣う生き方に変わることです。

つまり、イエス様のまねをして、生きてゆくことです。そのために神様によって造られた作品なのです。

そして、イエス様が始められた良い行いを、限りがあり、不完全な私たちも、その活動を実践してゆくことで、目に見えないキリストを、目に見える形で、教会として、社会の人々の前に示してゆくことです。

この教会にもいろんな人々が、その賜物を活かして働いているでしょう。ある人は、週報を、教会来ることのできない人に配っているかもしれません。またある人は、みんなの昼ご飯を作って、楽しい交わりに貢献しているでしょう。それぞれが、キリストの足になったり、手になったりして、キリストの役割を担っているということです。

みなさんがそれぞれ自分の真似るキリスト像を見つけて、それに徹する生き方をしていただきたい。

そしてその集合体である教会も、多くの役割でキリストの体になって、成長したいと思います。